

先崎千尋・著

サツマイモの神様 白土松吉とその時代

茨城県農業総合センター 首席専門技術指導員 泉澤 直

茨城県のほぼ中央部に位置する那珂台地と呼ばれる地帯は、火山灰土壌の黒い畑が広がる干ばつの常襲地帯である。その東端のひたちなか市は太平洋に面し、現在全国一のほしいも産地として活況を呈している。

本書は那珂地域の発展に粉骨砕身して力を注いだ農業技術者白土松吉の活動を、時代の動きとともに描いたものである。しかし、サツマイモの神様とまで言われた松吉の業績は、今ではすっかり忘れ去られ、資料も散逸して見当たらなかった。このため著者は、数多くの人を訪ね、隠れていた資料を自分の足で探し出した。また、当時の行政文書や新聞記事を丹念に当たり、再び松吉の姿を現代によみがえらせた。まさに、著者の執念の賜物である。

松吉は1881（明治14）年茨城県那珂郡三反田村（現ひたちなか市）に生まれた。本書は江戸時代末からの当地の歴史に触れ、75歳で世を去る1956（昭和31）年までを記述している。明治維新に至る混乱を経て欧米列強入りをめざし、最後には太平洋戦争へと突き進んでいく時代は、農村、農民に実に大きな負担を強いる時代でもあった。

松吉が那珂郡農会に勤めた明治の終わりのころ、静岡県からほしいもの生産技術が導入される。サツマイモは干ばつに強く、ほしいものに加工すれば商品性が高まり、経済的に苦しむ農家の収益を上げてくれる。まさに運命的な出会いであった。松吉は当時のサツマイモの平均収量の3倍以上という千貫取りを目指し、30年の歳月をかけ昭和初期に技術を確立する。そして、精力的

に普及に努め、地域の生産量を確実に高めて行った。本書では、ほしいも産地として発展していく姿が、統計的な資料に基づき明らかにされる。

石油資源のない日本は、太平洋戦争ではサツマイモからできるアルコールを航空機燃料として用いた。戦争が泥沼へと進むにつれ、ほしいもの生産は禁止され、アルコール用としての生産が強制されていく。松吉の多収技術は大いに期待されたであろう。しかし、国民高等学校（現水戸市）で行った栽培試験はすべてよい結果が得られた訳ではなく、松吉の困った顔が彷彿としてくる。

彼の実績はサツマイモだけにとどまらない。一例をあげれば、老朽化が激しく荒廃していた用水の改良を、強硬な反対意見を命がけで抑えこみ、自らの財産までつぎ込んで完成させた。彼には「水と土と人間の合理的調和活用」を理想としていたという。作物生産と水について大きな構想があったのであろう。

戦後、松吉は大火で家を失うが、人々は彼のために白土甘藷研究農場を設立し住まわせる。いかに彼が多くの人に敬慕されていたかを示す逸話である。

本書は、事実が淡々と語られているが、松吉の情熱や人間味がひしひしと伝わってくる。ぜひ、著者の前著「ほしいも百年百話」に続けて読んでほしい。現在の豊かな風景は、数多くのドラマを礎としていることがわかるであろう。

発行：茨城新聞社、定価：952円＋税、B5変型判、240頁